

「真実の虚偽」とは何か？

—プラトン『ポリテイア』の虚偽論序説—

納富 信留

1. かき消された虚偽論

プラトンは哲学者を「真理を見ることを愛し求める者 (οἱ τῆς ἀληθείας φιλοθεάμονες)」と定義したが(『ポリテイア』5.475E)、その一方で「虚偽、嘘 (ψεῦδος)」に対しては寛容な態度をとり、とりわけ『ポリテイア』の理想国論では「高貴な嘘 (γενναῖον ψεῦδος)」(3.414B-C)¹を積極的に活用することさえ提案している。この見かけの矛盾をどう理解するか、それが真理探究としての哲学にどう影響するのかが研究上の争点となっている。もし真理の尊重を掲げながら便宜のため虚偽を用いるのであれば、哲学はいわば二枚舌を使うことになり、虚偽の営みとなる。プラトンはそういった非難を避けられるのか。『ポリテイア』において「虚偽」がどう捉えられているかは、それが最初に規定された第2巻381E-383Aの議論(以下「虚偽原理論」と呼ぶ)から読み解くべきであろう。とりわけ、神と人間が最も嫌悪する「真実の虚偽」(2.382A-B)²とは何か、が解明されなければならない。

「高貴な嘘」の例は2つある。まず、理想国の市民たちが「大地から生まれた」という神話を共有し、生得的な金属に応じた役割を果たすと信じることで、ポリスとしての一体性と絆が保たれる(3.414B-415D)。もう一つは、守護者の間で婚姻をコントロールして優秀な男女を結婚させ子供をもうける方途として、公平を装った操作的な籤引きが提案される(5.459C-460A)。それらは必要で有用な嘘であるが、前者は国家イデオロギーの起源として、後者は隠された優生学として、共に全体主義的な政治論であると、現代の厳しい批判を受けている。プラトン研究者に止まらず広く論議を呼んできたその問題も重要であるが、そもそもプラトンが『ポリテイア』で「嘘、虚偽」をどう取り扱ったかを虚偽論として総合的に考察する必要がある³。

それら2つの「高貴な嘘」が共に言及するのが(3.414B, 5.459D)嘘を用いる理論的根拠を提示する第2巻の虚偽原理論である⁴。その議論が導入されたのは、

理想国で守護者になる子供の教育（初等教育）に関する最初の詩人批判の文脈である⁵。そこでは、初等教育に用いられる「虚偽＝虚構（*ψεῦδος*）⁶」の吟味と選別がなされ、詩人と彼らの詩作品は「虚偽」という基準で批判的に検討される。虚偽の利用と批判をめぐって鍵となる虚偽原理論は、研究者によって散発的に言及されてきたが、それ自体はほとんど検討されていない⁷。そこでは「真実の虚偽」という撞着表現により虚偽の本質が示されているが、当該テキストの読みには混乱と問題が残されている。この状況は、研究者が虚偽の本質を検討することなく「高貴な嘘」という応用問題に飛びついてきた様を示す。「真実の虚偽」を開示するテキストは、現代の政治哲学的関心にかき消されてきたのである。

本稿は、虚偽原理論のテキストを丁寧に検討することで、プラトンが「虚偽、嘘」をどう考えたかの基礎を明らかにする。ポイントは2点ある。第1に「虚偽」が問題提起される文脈、とりわけ詩という虚構を用いる初等教育論と、詩人の神についての語りの吟味を見定めること、第2に「虚偽をなす（*ψεύδομαι*）」というギリシア語の含意を哲学的に再検討し、それが「ソクラテスの逆説」となる意味を考察することである。それぞれ第2節、第3節で扱う。この検討から「虚偽をなす」を悪と見なす基本姿勢が明らかとなり、その裏返しに「真実をなす」という「正義」が浮かび上がる。

2. 虚偽原理論のテキストとその文脈

2. 1 『ポリテイア』第2巻 381E-383A

虚偽原理論が置かれるのは、ソクラテスがアデイマントスを相手に「神」についての詩人の語り方を吟味した「第2の軌範」の後半部である。その前半部で、神は決して自ら変化することはないという原則を認めた後、本来はあり得ない変身がなされたと思わせる可能性について、神が「虚偽をなす」かどうかを検討される。その中心テキスト 381e8-382c8 は次の通りである（重要な異読はない）。

「いや、では」と私は言った。「神々は自身で変化することはありませんが、騙したり（*ἐξαπατῶντες*）誤魔化したりして（*γοητεύοντες*）、自分があらゆる姿で現れる（*φαίνεσθαι*）と私たちに思われるようにするのだろうか。」

「多分そうでしょう。」と彼（アデイマントス）は言った。

「では、どうか。」と私は言った。「神は言論や行為で現れ（*φάντασμα*）⁸を差し出して虚偽をなすこと（*ψεύδεσθαι*, **Ψ1**）⁹を望むだろうか。」

「私は分かりません。」と彼は言った。

「君は分からないのかね。」と私は言った。「真実の虚偽 (ὡς ἀληθῶς ψεῦδος) は——そう言うことが可能であれば——神々も人間も誰もが嫌悪するのだと。」

「どんなことをおっしゃっているのでしょうか。」と彼は言った。

「こんなことだよ。」と私は言った。「すなわち、自分自身のどこか最も主要なものに (τῷ κυριωτάτῳ) ¹⁰、最も主要な事柄に関して (περὶ τὰ κυριώτατα)、自ら進んで虚偽をなすこと (ψεύδεσθαι, Ψ2) を望む者は誰もおらず、すべてのなかで最もそこでそれを¹¹獲得していることを恐れているのだと。」

「私は今もまだ理解していません。」と彼は言った。

「君は、私になにか崇高なものを語っていると思っているのだ。」と私は言った。「私が言っているのはこういうことだ。すなわち、魂に (τῇ ψυχῇ) 本当にあるものに関して (περὶ τὰ ὄντα) ¹²虚偽をなし (ψεύδεσθαι, Ψ3) 虚偽をなしてしまっていること (ἐψεῦσθαι, Ψ4)、つまり無知である (ἀμαθῆ) 状態で、そこで虚偽を所持しておりかつ獲得していること (ἔχειν τε καὶ κεκτηῖσθαι τὸ ψεῦδος) を、すべての者は決して受け入れないだろうし、このような場合にそのことを最大限に嫌悪しているということだ。」

「大いにそうです。」と彼は言った。

「いやそれでは、今しがた言ったことだが、虚偽をなしてしまっている者の (τοῦ ἐψευσμένου, Ψ5) 魂における不知 (ἢ ἐν τῇ ψυχῇ ἄγνοια) が、真実の虚偽 (ὡς ἀληθῶς ψεῦδος) と呼ばれるのは最も正当だろう。そう言うのは、言論における虚偽とは、魂におけるその状態のなんらかの模倣物 (μίμημά τι) であり、後に生じている影像 (εἶδωλον) であり、まったく混じり気なしではない虚偽 (οὐ πᾶν ἄκρατον ψεῦδος) なのだから。そうではないかね。」

「まったくその通りです。」

「一方で、本当の虚偽 (τὸ τῷ ὄντι ψεῦδος) は、神々だけでなく人間によっても嫌悪されている。」

「私にはそう思われます。」

「他方で、言論における虚偽 (τὸ ἐν τοῖς λόγοις ψεῦδος) はどうだろう。嫌悪に値しないものになるのは、いつ、誰に役立つ場合だろうか。」

一連のやりとりで注目されるのは、当初はソクラテスの言っている意味がほと

んど分からないアダイマントスに対して、ソクラテスが説明を重ねて馴染みのない議論が解きほぐされていく過程である。

引用部後の 382c8-383a6 は要約で示すが、神と人間の対比を枠組みとして次の議論がなされる。言論における虚偽が必要だと考えられる場合として、3つのタイプが提示される。

第1のタイプは、恐れから敵との関係で虚偽を語る場合であるが¹³、人間には必要でも神には不必要である。第2のタイプは、身内や友人による狂気や無思慮からの行為を阻止するため、やむを得ず彼らに虚偽を語る場合であるが、これも人間には有用でも、神には無縁な目的である。神に愛される者がそのような行為を行うことはあり得ないからである。これら2つのタイプの虚偽の語りは、合わせて「薬（φάρμακον）」のように有用だとされる。治療的な有用性である。

第3のタイプは、昔起こった出来事のような「真実であるかどうかを知らない」事柄について¹⁴「虚偽をできるだけ真実に似せる」（382d3）場合であり、それが詩人の行っている「虚偽＝虚構を語る」ことである。だが、そのような虚偽の有用性は明らかに人間にだけ適用される。神は昔のことや真実を知っているので、あえて偽物を語る必要はないからである¹⁵。

以上の議論から、神は無虚偽で（ἀψευδής）真実な（ἀληθής）存在であると結論される（382e6-11）¹⁶。この虚偽原理論は全体として「神は虚偽をなさない」という原理を証明するための「虚偽」の基本的考察となっている。

2. 2 虚偽原理論の文脈

第2巻に虚偽原理論が置かれるのは、守護者となる子供たちの初等教育における詩の位置づけ、および、そこでの神々についての語り方を吟味するためである。それゆえ「虚偽」というテーマは二重の問題、即ち、詩人の語る言論が「虚偽＝虚構」であることの確認、並びに、神は「虚偽をなす」ことが決してないという証明の交点にある。第3のタイプについて語られる「神には虚偽の作り手＝詩人（ποιητής ψευδής）は存在しない」（382d9）という言明は、両者への結論である。一見離れた2つの問題を重ねるために、虚偽論の文脈を正確に押さる必要がある。

まず、文芸（μουσική）と体育の2本柱でなされる初等教育論の冒頭で「言論（λόγος）が文芸に属する」ことが確認され、言論には「真実、虚偽（ἀληθής, ψεύδος）」¹⁷の2種があるとされる（376E-377A）。両方の種における教育が必要であるが、子供に語る物語（μῦθος）は全体としては虚偽＝虚構（ψεύδος）であることから、ここではそちらが検討される（377A）。もう一方の「真実の言論」

による教育が何であるかはここでは語られないが、第7巻が論じる哲学者の数学の高等教育がそれに当たると考えるのは適当であろう。

大きな物語を代表するホメロスやヘシオドスは「虚偽の物語 (μύθους ψευδεῖς) を作り上げて」(377D) 語っていた。彼らが詩で歌う事柄は神々や英雄や過去の世界である以上、人間にはそれらの事実について確実な知がなく、その限りで必然的にすべて「虚構」である。物語の一部に真実が混じることがあっても(377a4-5)¹⁸、物語が全体として虚構であることに変わりはない。

しかし、詩作では「立派でない仕方(μὴ καλῶς) 虚偽をなす(ψεύδηται)」場合、つまり、それに似せている原物に全く似ていない場合に最大の非難が向けられる(377D)。そして、最も偉大である神々について虚構(ψεῦδος)を語る彼らは、立派でない仕方「虚偽をなした(ἐψεύσατο)」と非難される(377E)¹⁹。神々同士が戦うなど、真実でない物語(378C)を語っているからである。ここでの詩人批判は、虚構を作るという詩人の役割そのものではなく、その虚構が立派でないこと、つまり真実に対する非類似性に向けられている。裏を返せば「立派に虚偽=虚構をなす」余地は残されており、必要な限りでその追求が課題となる。

詩人たちが神について物語を作る際に従うべき法・軌範(τύποι)は2つある。第1に、神は善いことの原因であり、悪しきことの原因ではないこと、第2に、神は変化せず、欺かないことである²⁰。虚偽と欺きに関わるのは第2の軌範であるが、その基本となるのは、神は単純にして最善であり、それゆえ自身を変えることも変えられることも不可能であるという必然性である。そうである以上、詩人たちには神々の変身物語などの「虚偽をさせてはならない(καταψευδέσθω)²¹」し、そのような事柄で私たちに「虚偽をなさせてはならない(ψευδέσθων)」(381D-E)と命ずる。取り上げられた諸例は、虚構である物語を悪しき仕方(κακῶς)語った言論、つまり、真実に似た創作ではない語りとして退けられる。

虚偽原理論が証示する「神々は欺かない」という命題(381E)は、第1の軌範である「神は悪の原因ではない」にも根拠を持つが、第2の軌範の根幹である「神は変化しない」に発する系である。神が実際に変化しない以上、多様に変身するという虚偽の考えを人間に与えること、つまり嘘で欺くことでしか異なる姿で自らを現わすことはない。しかし、神は「虚偽をなす」こともあり得ないと証明することで、第2軌範は完結する。これが前項でみた議論である。

神は不変の存在であるがゆえに虚偽に一切携わらないが、それに対して人間は「真実の虚偽」は嫌悪するものの、その模倣である「言論における虚偽」の一部

は有用性や必要性ゆえに嫌悪しない。有用な虚偽として挙げられた2つのタイプは、敵への恐れや身内のために時と相手によって言論で虚偽を語ることであり、この有用性ゆえ支配者への「高貴な嘘」が容認される(3.389b8-10)。さらに、真実を知らないがゆえにあえて虚偽を模倣物として語る第3のタイプがあり、こうして詩人の虚構創作は「言論における虚偽」の一種として有用だと認められる。だがその場合でも、できるだけ真実に似せた立派な語りが要求され、そうでない場合は厳しく批判され排除される。そこで、知らないはずの事実について「真実に似せる」とは、理論的に正しく整合的な倫理の軌範に適うことであり、神々についての2つの軌範がその実例となる。

初等教育論の導入で「物語で物語られるように(ἐν μύθῳ μυθολογοῦντες) 言論で人々を教育する」と語られていた(376D)。理想国の描きも「虚構」として一種の物語り行為に他ならないが²²、それは真実について不知を自覚している限りで、正しい仕方での創作として認められる。語られる事柄について知をもたないと自覚するソクラテスにとって、それは「真実に似た」語りだからである。こうして虚偽論は『ポリテイア』の語りそのものの方法論への反省にもなっている。

以上のような「虚偽」の二重性、つまり詩との関わりと神との関わりという論点の交差は、神と人間という区別と対比を基本としている。「虚偽をなす」ことがあり得ない神との対比で、私たち人間にとっての2種の「虚偽」が区別され、「真実の虚偽」の模倣としての「言論における虚偽」が時と場合によっては有益であることが示される。一方で、ここで確保された虚偽の有用性が後の「高貴な嘘」を保証するが、他方で、人間にのみ属し、正しく遂行されれば教育における効用も認められる虚偽として詩作も許容されるのである。神は決して虚偽をなすことはないが、人間は有限性ゆえに虚偽が必要となる。その正しい把握と自覚が、「真実の虚偽」との関係で哲学の語りを可能とする。

3. 議論の解釈

3. 1 解釈上の問題点

2. 1で引用したテキストで問題となるのは、5例用いられる *ψεῦδομαι* という動詞の意味である。この動詞は、ここで用いられる現在形と完了形では中動態と受動態が同型であり形態上は見分けがつかないが、解釈者や翻訳者はほとんどそれを自覚することなく、適宜どちらかの訳語か、どちらともつかない意識を与えている。この動詞は中動態では「虚偽を語る、嘘をつく (tell a lie)」と訳される

能動を意味し、受動態では「（誰かによって）虚偽をなされる、欺かれる（be deceived）」という受動の意味となる。これを踏まえて、**Ψ1** から **Ψ5** までの解釈を検討しよう。

まず、主題である神について問われる「神は $\psi\epsilon\upsilon\delta\epsilon\sigma\theta\alpha\iota$ (**Ψ1**) を望むか」という言明は、文脈から異論なく「虚偽をなす=嘘をつく」という能動を意味し、人間を欺く意図的な行為を含む。それゆえ、**Ψ1** を受動態でとる解釈者は一人もない²³。その質問に対話相手アデイマントスはすぐには同意せず、分からないと答えるが、その理由は、ギリシア神話でゼウスをはじめとする神々が都合よく嘘をついて人間や他の神々を欺くことはしばしば描かれるからであろう²⁴。

その反応を受けて、ソクラテスは「真実の虚偽」が人間と神々に嫌悪されるとして、「自ら進んで $\psi\epsilon\upsilon\delta\epsilon\sigma\theta\alpha\iota$ (**Ψ2**) する者はいない」というテーゼを語る。**Ψ1** と同一の不定詞形であるにもかかわらず、この **Ψ2** は受動態でとる解釈者たちが多数現れ、「自ら進んで欺かれる者はいない」と訳している²⁵。

さらに、**Ψ2** を敷衍して言い直す次の文章で現在形 **Ψ3** と完了形 **Ψ4** の不定詞が並置されるが、解釈はさらに多岐に分かれる。通常は2つの時制を合わせて現在の継続的状态を表すと解釈されているが²⁶、**Ψ3** と **Ψ4** の間に断絶を見て前者を中動態、後者を受動態で訳し分ける解釈もある²⁷。両者をセットで捉える大多数の解釈者でも、**Ψ2** と同じ中動態とするか、**Ψ2** と同じ受動態とするか、あるいは**Ψ3** から新たに受動態に変わったとすることで解釈が分かれる²⁸。

最後に、**Ψ5** で完了形分詞で虚偽の状態にある人を指す表現があるが、ほぼすべての解釈者は受動態で「欺かれてしまっている者」と理解している²⁹。

これらの箇所での翻訳のばらつきは、当該テキストが注意深く読まれておらず、内容も吟味されてこなかったことに起因する。焦点は、同じ動詞が途中で態と意味を変えているかどうかにある。明示的に説明を与えている Harte は、明らかに能動を意味する中動態の **Ψ1** (382a1) から受動的な意味にとる **Ψ5** (382b8) への変化を、名詞 $\psi\epsilon\upsilon\delta\omicron\varsigma$ (382a4, c7) に媒介されたとして、動詞の態の転換がその途中で生じていると説明する³⁰。しかし、これは合理的ではない。

まず、「神は虚偽をなさない」という命題を示すために語られる「真実の虚偽」(382a4) は **Ψ1** を受けた能動的意味に他ならない。382b6-7 はその繰り返しである限りで同義であり、382c4 も「言論における虚偽」(382b8-c2, c7) と対をなす以上、能動的意味である。このように名詞 $\psi\epsilon\upsilon\delta\omicron\varsigma$ は一貫して能動的な意味で用いられている。

では、「虚偽を獲得している ($\kappa\epsilon\kappa\tau\eta\sigma\theta\alpha\iota$)」(382a9, b3) という表現が「欺か

れる」という受動を含意するのか。「虚偽をなす、欺く」という能動の獲得と所持は能動的事態であり、「虚偽をなされた、欺かれた」という受動の意味での「虚偽」を所持した場合にだけ受動的事態になると考えるべきであろう。Harteの言う態の転換は論理的に整合的でない。

さらに、第7巻で哲学者のあるべき本性が再論される際の記述ともそぐわない。真実に対して魂は「自ら進んでの虚偽を嫌悪し、自身でも耐えられず、他人が虚偽をなすのにも腹を立てる」(535e1-3)と語られる際の「虚偽」は能動的な意味であり、他人について「虚偽をなす」のも中動態に他ならないからである³¹。

「神々も人間も真実の虚偽を嫌悪する」(382a4-5)という言明は、神が虚偽をなすことを望まないことの説明であるが、神自身が欺かれることは不可能である以上、神が嫌う「真実の虚偽」も能動的な意味であろう。一般に「欺かれること」に嫌悪があっても、自分が虚偽をなすことを避ける理由にはならない。

以上から、**Ψ1**に始まる $\psi\epsilon\upsilon\delta\epsilon\sigma\theta\alpha\iota$ という能動的な意味での中動態は、解釈者たちの混乱にもかかわらず、**Ψ2** から **Ψ4** までは同じ意味で継続すると考えるべきである。最後に、ほぼすべての解釈者は **Ψ5** は受動態で訳しているが、それも同様に中動態で解釈すべきことは、内容を検討する中で示す。

3. 2 「虚偽を語る」における意図と真偽

虚偽論が論じる「虚偽」とはどのようなものか。その動詞 $\psi\epsilon\upsilon\delta\omega$, $\psi\epsilon\upsilon\delta\omicron\mu\alpha\iota$ は「虚偽をなす (be false)、虚偽を語る (tell a falsehood)、嘘をつく (lie)」といった意味をもつが、その振る舞いは複雑である。基本的な意味を考察しよう³²。

「虚偽を語る、嘘をつく」は「真実とは異なることを語る」ことと規定されるが、私たちは「嘘をつく」と「虚偽を語る」との間で、状況によって意味の違いを見る。「嘘をつく」という言語行為には強弱2種がある。強い種は、相手を欺き誤らせる意図をもって、つまり、相手がそれを真実だと受け取るように、真実ではないことを真実として語る場合である。弱い種は、必ずしも相手を欺く意図はもたずに自分を偽装するために語る場合で、相手がそれを真実ではないと気づいても構わずに虚偽を語る場合である。後者は、必ずしも欺きや誤解という悪徳を含意せず、了解が共有されたなかでコミュニケーションの手段として嘘が活用される。「何かの振りをする」のもその一種であり、その語りを積極的に用いるのが演劇や文学という「虚構 (fiction)」である。

「虚偽を語る」ことが命題の真偽とどう関わるかは、さらに複雑である³³。話者は自分が「真実である」と信じていることとは異なることを語る場合に「嘘を

つく＝虚偽を語る」のだが、その人が信じていた内容が実は偽であった場合、嘘として語った内容が真実であることもあり得る。他方で、そのような話者の意図に関わりなく、語られた言葉が事態に即して「虚偽である」として「虚偽を語る」と言われる場合もある。つまり、本人が真実だと信じてそれを語っていても、「この人が言っていることは嘘だ」と指摘される場合もある。「虚偽を語る」の内実は、意図の強弱と語りの内容の真偽という2重の基準から把握される。

現代の詩や演劇や文学は、実際の出来事ではない設定で「真実でないこと」を語ったり行為したりする虚構（フィクション）であり、それを「真実である」と受けとる聴衆や読者がいない限り欺きにはならない。だが、『ポリテイア』第2巻で子供たちの教育で論じられるのは、この意味での虚構ではなく、真実を知り得ないがゆえにあえてそれに似せて虚偽を語るという「虚偽＝虚構」である。現代人にとって神々の物語は空想上のフィクションに見えるが、プラトンはそこで語られる「神々」が至高で最善の存在であると認めており、その前提の上で議論している。それゆえ、神々をめぐる物語は真偽をめぐる厳しく判断され取捨選択される対象となっている。プラトンが『ポリテイア』第2～3巻で検討するのはそのような有用な虚構の許容範囲であり、それを定めるためには「虚偽」の原理的理解が必要なのである。

これとは根本的に異なり、第10巻のミーメーシス論が批判するのは、実際には「虚構＝虚偽である」にもかかわらず「真実である」と思い誤ってしまう私たちの認識状態であり、それを作り出す詩人の役割であった。虚偽の本質を明らかにする虚偽原理論は、そこでイデア論を経てより深い形で真理と虚偽の問題を再提起するのである。

3. 3 動詞 ψεύδομαι とその振る舞い

次に、ギリシア語 ψεύδω, ψεύδομαι に焦点を当てよう。この動詞には関連する名詞 ψεύδος と形容詞 ψευδής があり、正確な語源は不明であるが、ホメロスやヘシオドスら初期から用いられている³⁴。ホメロスでは能動態も使われるが³⁵、通常は中動態で「虚偽を言う、嘘をつく」を表し³⁶、プラトンに能動態の用例はない。中動態と受動態は多くの時制で同型であるが、『ポリテイア』では基本的に中動態が用いられ、Brandwood (1976, 967)の『プラトン索引』は Ψ2, Ψ3, Ψ4, Ψ5 の4つと 3.413a6 の5例だけを受動態としている。私はそれらの箇所もすべて中動態と解するが、文脈で解釈されるしかない。

Herrmann (2020, 40)は、おそらく LSJ に依拠して、ギリシア語の語法で中動態完

了形 ἐψεῦσθαι は「欺かれている (be deceived)」という状態を表すと論じている。しかし、プラトンの他の対話篇では中動態完了形が「自身で誤っている」という能動的な意味で使われており、受動の意味ではない。この点は重要なので『ポリテイア』以外の全用例を確認しておく³⁷。まず、『メノン』71d6 でソクラテスは「徳とは何かを知っている人に会ったことがない」と主張していたが、もしメノンやゴルギアスが知っていたら「幸運に虚偽を語っていた (ἐψευσμένος)」ことになる。『プロタゴラス』358c5 では「無知 (ἀμαθία)」という事態は大切な事柄について「虚偽をなしている (ἐψεῦσθαι)」こととされ、誰かに欺かれているという意味ではない。最後に、『テアイテトス』第2部の「虚偽の判断」をめぐる議論でも、195a9 と 200a6 の2箇所では「自ら思い誤る (ἐψευσμένοι, ἔψευσται)」という意味で用いられており、誰かに欺かれているという受動の含意はない。195A でもその状態は「無知 ἀμαθεις」と呼ばれている。これらの例から『ポリテイア』の中動態完了形も能動的な意味で用いられていると見なして構わない。

『ポリテイア』第2巻は神をめぐる「虚偽」の問題を扱うが、そこでは「神は真実を知っている」という知恵が前提になり、従って神が「虚偽をなす=嘘をつく (ψεύδεται)」としたら、自分のために真実とは異なることを意図的に語ることになる。「真実を語る」が正しい行為で徳、つまり善だとすると、どんな意図があるにせよ「虚偽を語る」ことは不正で悪徳になる。だが、神にそれらの悪を帰することは決してできない。無論、通常語られていたギリシアの神話では、ゼウスをはじめ神々が人間に対して、あるいは互いに嘘をついて騙し合っているが、そうした語りこそ哲学者からの厳しい批判の標的となったものである³⁸。

対照的に人間は、個別の事柄について真実を知っていることも知らないこともある。人間は過去や未来の出来事については知らず、現在の事実についても誤った見方をすることが多い。また、正義や美や善といった大切な事柄について、ソクラテスは人間には知はないと考えて、不知の自覚を表明していた。さらに、そのような人間は自分が「真実だと思うこと」とは異なる内容を故意に語ることがあり、それが「言論における虚偽」としての「嘘をつく (ψεύδεται)」である。

では、そのような言葉で語られる通常の虚偽ではない「真実の虚偽」とはどのようなものか。それは、誰か他人に向けて語るものではない以上、自身との関係で生じる「虚偽をなす (ψεύδομαι)」あり方であろう。もし真実を知る神が見たら「この人間は真実だと思い込んでいるが、それは虚偽だ」と見なされるように、本人には気づかれず外から記述される虚偽である。本人がそう信じたきっかけは様々であろうが、基本的に魂が自身に対して虚偽をなしている。

動詞 *ψεύδομαι* の振る舞いとして見ると、「欺かれた＝虚偽をされた」という受動態は他人から受けた状態を表すが、中動態の「虚偽をなす」は、虚偽を語る相手を欠く場合には、文字通り自分が自分に対して、自分との関係で行っている虚偽を意味すると解釈できる。つまり、能動の意味を持つ中動態は、相手に言葉で語る場合は通常の「虚偽をなす＝嘘をつく」であるが、魂の内で行われる「虚偽をなす」では、自分で虚偽を思い込んでいる場合に当たる。従って、この中動態は自分で自分を欺いている再帰的な意味となり、結果的には「欺かれている (be deceived)」という受動の意味で訳す解釈者たちの傾向も理解できる。しかし、他人によって引き起こされた受動の事態ではない。

虚偽原理論のテキストで動詞 *ψεύδομαι* の 5 つの用例は、基本的に一貫して中動態の「自分で虚偽をなす」を意味すると読むことが可能であり、そう読むべきである。とりわけほとんどの解釈者が受動態でとっている完了形分詞の **Ψ5** は「自分で自分に虚偽をなしてしまっている＝すっかり虚偽を信じ込んでいる」という中動態に解すべきである。そこからどのような含意が読み取れるかが、次項の検討課題である。

3. 4 「ソクラテスの逆説」としての「真実の虚偽」

「真実の虚偽」の意味を理解するために、**Ψ2** が語られる「自ら進んで虚偽をなすことを望む者は誰もいない (*οὐδείς ἐκὼν ἐθέλει ψεύδεσθαι*)」という一節を説明する必要がある。この表現は一見して明らかなように、いわゆる「ソクラテスの逆説 Socratic paradox」の形式をとっている³⁹。ソクラテスの逆説は、主に徳を知とすることで帰結する常識外れの主張であり、「自ら進んで悪をなす者はいない」⁴⁰や「自ら進んで誤る (*ἀμαρτάνειν*) 者はいない」⁴¹がその代表である。「自ら進んで (*ἐκὼν*)」は「知りながら」と等しく、反対に「意に反して (*ἄκων*)」は「知らずに」あるいは「(知っていても) 渋々と、不本意に」を意味する。

ソクラテスの逆説に似た表現は「神が変身しない」という論証でも用いられていた。「誰かが自ら進んで自分をより劣った者にする (*ἐκὼν αὐτὸν χείρω ποιεῖν*) だろうか」(2.381C) という疑問は、逆説と呼ぶほど非常識には聞こえないかもしれないが、論理は同様である。

3. 1 で検討したように、多くの注釈者は **Ψ2** を受動態の「虚偽をなされる＝欺かれる」とするが、その場合「誰も自ら進んで他人に欺かれることを望まない」や「誰も他人に欺かれていることを良しとする者はいない」というごく常識的な意味になり、逆説ではない。だが、中動態「虚偽をなす」で読む場合に、私たち

の常識に真っ向から挑戦するソクラテスの逆説となる。私たちは日常平気で意図的に嘘をついており、自分が嘘をつかれて欺かれるのは嫌っても、他人に対して都合のよい嘘をつくことにそれほど罪悪感を感じないことが多いからである。

だが、「自ら進んで虚偽をなす者はいない」という中動態の命題で理解すると、それは「自ら進んで悪を行う者はいない」と「自ら進んで誤る者はいない」という2種の逆説に関わることが分かる。虚偽をなすことは真実を損ねる限りで過誤や失敗であり⁴²、かつ、それは悪だからである⁴³。これら2つの逆説を重ねたところで「虚偽をなす」という場面でソクラテスの逆説が成立する。

「自ら進んで悪を行う者はいない」という逆説は、悪を行う人は「何が悪かを知らない」という事態を示す。つまり、何か悪事に手を染める場合、本人はその行為が「自分にとって善＝利益だ」と思い込んで為すのだが、実際にはそれが「悪＝害」にあたるので、本当に知っていたら決して行わないはずであり、従って、無知ゆえに為された行為に他ならない。虚偽をなすことも一種の悪だとしたら、自身にとって有益ではないことを知らないから行っていることになる。それが「自ら進んで悪を行う＝虚偽をなす者はいない」という逆説である。また、「誤る」という意味での「虚偽」も、知っていながら自ら進んで行うことではない。誰もが真実という的を射当てて善を得ようとしており、誰も失敗という悪を求めてはいないからである。以上から、「自ら進んで虚偽をなすことを望む者は誰もいない」という命題がソクラテスの逆説として提出されており、そこには「虚偽は悪である」こと、並びに、意に反してそれを行う者は「無知である」ことが含意されると判明した。

言論において虚偽をなす、つまり「虚偽を語る」とは、語り手が真実を知りながら、あるいはそう信じながら、相手にそれとは異なることを語り真実だと思込ませることである。それは、語り手と聞き手の間にある離反と、語り手自身が信じることと言うことが異なるという離反の二重性で成り立つ。それに対して「真実の虚偽」は言論で他人に向けられるものではなく、当人がまさに魂に関して虚偽をなす状態である。それは「真実を知らずに、虚偽を真実だと考える」という事態に他ならない。すでに検討したように、そこで *ψεῦδομαι* の中動態は「自らが自身に対して虚偽をなす」という再帰的な意味をなす。真実に「虚偽」と言われるのは、自分に対する究極の虚偽という自己自身のあり方なのである⁴⁴。

このような自己虚偽は自ら進んでなす者がいない以上、本人が気づかない「思い込み (*δόξα*)」の状態、つまり「知らないのに、知っていると思込んでいる」という「無知 (*ἀμαθία*)」に他ならない⁴⁵。ソクラテスが 382b2-3 で「虚偽をなし

(ψεύδεσθαί, Ψ3) 虚偽をなしてしまっている (ἐψεῦσθαι, Ψ4) 」を「無知である (ἀμαθῆ) 」と言い換えているのは、これを意味する⁴⁶。従って、「真実の虚偽」とは、自分が魂で真実とは異なる考えをもっているにもかかわらず、それが真実だと思い込んでいる自己の無知なあり方であり、それは「虚偽な ψευδής 人」というあり方なのである。

ソクラテスはつねにこのような思い込み (δόξα) にある「無知 (ἀμαθία) 」を魂にとって恥ずべき最大の悪だと非難していた⁴⁷。「真実の虚偽」とはそのような究極の悪に他ならず、それゆえ神も人間も最大に嫌悪するのである。ただし、両者で「嫌悪 (μισεῖν) 」の内実は異なる。神は無知とは無縁のため、人間たちが陥る状態を嫌悪するという意味だが、人間にとっては自分がそんな最悪な状態に陥ることを恐れて嫌悪するという意味である。従って、人間は時に有用さと引き換えで「嫌悪に値する」状態を緩和して虚偽を受け入れるのである (382c7-8)。

「真実の虚偽」は、従って「虚偽をなしてしまっている者の (τοῦ ἐψευσμένου) 魂における不知」と言い換えられる。ここでは「不知 (ἄγνοια) 」という「知らない」状態一般を指す語が用いられるが、虚偽状態にある自身のあり方に気づかない者もつ限りの不知は、先に説明された「無知 (ἀμαθία) 」にあたる。つまり私たち人間のだれもが被る「不知」の中で、さらに虚偽をなしてしまっている無反省な悪きあり方が「無知」なのであり、2つの術語は丁寧に区別され語られている。ここで知が関わる「最も主要な事柄」、つまり「本当にあるもの」とは、ソクラテスがつねに探究している「善、美、正義」といった大切な事柄であろう。

以上の解釈を受けて、神と人間の対比を再考しよう。神は完全な知者であり、最大の悪である虚偽＝無知を嫌悪し、人間に対して虚偽＝悪をなすこともあり得ない。他方で、人間は知を欠いた状態にあり、しばしば知らずに虚偽を真実だとする思い込みに囚われる。人間が陥る「真実の虚偽」は大切な事柄に関する無知を意味し、神には無縁である。ここで「真実の、本当の」という撞着修飾語がつくのは「真実な (ἀληθής) 」存在である神への対極を表す。一方に神という純粹で真実な知があり、他方に完全な虚偽にある人間の無知がある。その中間に「まったく混じり気なしではない虚偽」 (382c1-2) があり、それが「言論における虚偽」という中間者である。人間には、その中間者をどう扱うかが問われる。

この理解の上で、「言論における虚偽」を「真実の虚偽」の一種の「模倣物 (μίμημα) 」であり「影 (εἶδωλον) 」とする関係が理解される。魂の状態と外に現された言葉を「原物と像」とするこの関係は、本質と認識の2つの観点で説明される⁴⁸。

第1に、魂において「知らないのにそれに気づかない」無知の状態が、真理からの最大の離反として「真実の虚偽」をなす。それに対して、言葉に出して他人に語る虚偽＝嘘は、心にある理解と言明との間の離反として、そういった不知を模倣する関係にある。つまり、内的な虚偽と外化した虚偽は、真実からの離反という本質において模倣関係で捉えられる。より悪の程度が強いのは原物である。

第2に、認識においてもソクラテスの逆説を模倣している。言論における虚偽は、心の中では真実を知っている、あるいは知っていると思っているのに、言葉の上でそれとは異なる虚偽を口にする場合である⁴⁹。そこで話者は、自分が知っていると考える真実を外して語るという「悪」をなしていることを薄々分かってはいる。だが、「自ら進んで悪をなす者はいない」というソクラテスの逆説から言うと、それをあえて行う者は本当は分かっていない無知の状態にいる。つまり、意図的に他人に嘘をついて欺くということは、真実を自ら奪うという限りで悪であるにもかかわらず、その悪を理解せずに利益があると信じているアクラシア状態である。それは、自身が被っている「真実の虚偽」を他人に向けて言葉で再現する限りで、自己の無知の「模倣物、影」なのである。

「言論における虚偽」として許容される第3タイプは「虚偽をできるだけ真実に似せる」（382d3）創作であった⁵⁰。ここに「似せる（ἀφομοιοῦντες）」という表現で模倣の概念が再度登場するが、これは詩の言葉が人間の不知ゆえに必要な虚偽でありながら、真実の写しである限りでは虚偽と真実の中間に位置することを示す。その自覚が「虚構」としての物語の言論を人間にとってぎりぎり使用可能にするのである。

ギリシア社会の教育では、ホメロスやヘシオドスの詩から、人間たちは神々が姿を変え嘘を語ると信じている。真実を知らないにもかかわらず、詩人から学ぶことでその虚偽を真実だと思い込んでいたとしたら、「真実の虚偽」という無知に留まることになる。だが、もしそれは虚偽だと自覚して最善の仕方でも語られるように吟味と反省を加えたら、それは有用な「言論における虚偽」として許容される。従って、神についての語りの軌範の提示は、私たち人間の「無知」を暴露し、そこから解放する新たな語りの創出であった。

4. 虚偽論の射程

虚偽を語ることの是非という議論は、「高貴な嘘」という限定的な政治哲学のテーマではなく、神との対比における人間の本性という問題であり、理想国にお

ける詩の認容もその基盤で注意深く論じられていることが確認された。だが、この問題はさらに『ポリテイア』全体に深く関わっている。第1巻から第10巻までの視野が必要である。

対話篇の冒頭でソクラテスに老年について尋ねられたケファロスは、「意に反して誰かを欺いたり嘘をついたりしないこと (ἄκοντα ψεύσασθαι)」(1.331B)を財産の効用として挙げる。それを受けてソクラテスは「正しさ」について「真実を語り (ἀληθῆ λέγειν)、預かったものを返すこと」(331D)なのかと尋ねる。だが、直後に介入したポレマルコスとは規定の後半部だけを吟味し、「真実、虚偽」という論点是对話の表舞台から消えてしまう。

しかし、「正義」の定義と効用をめぐる対話では、「真実を語る」という正義のもう一つの面が見え隠れする。実際、ケファロスとの最後のやりとりでも、狂気に陥った友人に以前預かった武器を返すべきかという例で、そんな状態にある者に「あらゆる真実を語ろう (πάντα ἀληθῆ λέγειν) とする」者も決して正しいとは言えないと指摘され、同意される(1.331C)⁵¹。この事例が、私たちが検討した第2巻の箇所「言論における虚偽」を許容する人間ならでは第2のケースとして再登場したこと(2.382C)を見逃してはならない。第1巻で狂気の友人の例であっさりと却られたかに見える「真実を語る」という正義の理念は、像である「言論における虚偽」の範囲内の考察であり、「真実の虚偽」と正義の関係は残されている。ギリシアにおいて「真実である」とは何よりも人のあり方を指し、徳として「正義」と結びついていたことが重要である⁵²。そして、真実で知ある神は「正義」と結び付いている(2.380B)。

ケファロスは若い頃には、不正な者が死後に受ける種々の罰といった物語(μῦθοι)を笑い飛ばしていたが、死期が近づくとそれらが「真実(ἀληθείς)ではないか」と魂において恐れを抱くようになったという(1.330D-E)。そういった物語の適正さを検討する第2～3巻の初等教育論を受けて、第10巻での詩の再検討で、真似の技術(μιμητική)は真実そのものには触れることなく(600E)、「真実から遠ざかること第3番目のもの」と判定される(598B, 602C)。この哲学的判定は「真実を尊重する」という敬神の態度によるが(596C, 607C)、詩を全体として退けるこの模倣論は、詩人が語る物語が「虚偽=虚構(ψεῦδος)」であるという本性そのものの吟味であった。その教訓を受けて対話篇末尾で語られるエルの神話が「物語は救われた(μῦθος ἐσώθη)」という判定で終わることは、象徴的である(621B)。

完全に真実である神と、不知と有限性ゆえに虚偽を許容せざる得ない人間との

対比は、「正義とは何か」という根本問題において「真実、虚偽」というテーマを通奏低音として響かせる。「人間に可能な限り神のごとくになる」(2.383C)という哲学者の目標は、正義そのものである神にできるだけ似るという形で、哲学者に真実を語ることを求め、もしそれが不可能な場合には不知を自覚しつつ次善の道をとることを勧める。虚偽を許容する人間と社会のあり方は、嘘の積極的利用とは程遠い倫理の上で成立するのである。それは、神が何よりも「真実の」存在だからであり(2.382e8)、人間はその真理には与らない「虚偽」の中で、言葉を語って生きる存在だからである。

本稿は、虚偽の問題の基底にある「真実の虚偽」を解明することで、『ポリテイア』における虚偽論を読み解く出発点を据えた。第3巻では守護者の選抜にあたり「虚偽」の問題が再度取り上げられ(3.412E-413A)、他にも哲学者をめぐる虚偽の問題が論じられていく⁵³。理想国の語りそのものと合わせて、「高貴な嘘」もこの文脈で理解されるべきであろう⁵⁴。真実や虚偽は偶然に正しかったり不正だったりするのではなく、真実の虚偽は無知という最大の悪として「不正」のあり方なのである。

プラトンは他の多くの対話篇でも多角的に「虚偽」の問題に取り組んでいる。嘘を主題にした『ヒippias小』をはじめ、虚偽の判断・言論の可能性を検討した『テアイテトス』第2部から『ソフィスト』において、とりわけソフィストとの関係でこの問題は重要であり続けた。また、その考察を受けたアリストテレスは『ソフィスト的論駁について』で各種の誤謬を分析し、『形而上学』Δ巻第29章で「虚偽」の語義を示しつつ、同Θ巻第10章の真理論に至る。それらを射程に入れながら、プラトンの虚偽論を検討していく必要がある。

¹ Herrmann (2020, 59-61)では「高貴な」が8.544Cとの連想で皮肉である可能性が示唆される。

² ὡς ἀληθῶς ψευδός, 2.382a4, b6-7; τῷ ὄντι ψευδός, 2.382c4, 3.389b3-4. 校訂はSlings 2003を用い、その行数で言及する。

³ 「高貴な嘘」については、Schofield (2007), Hesk (2000, ch.3), Calabi (2013), Herrmann (2020)をはじめ多数の考察があるが、本稿はその主題を直接には論じない。

⁴ 2.382c10で導入された「薬(φάρμακον)」の比喩が3.389B, 5.459C-Dで用いられる。

⁵ 第2の詩人批判は第10巻前半にあり「詩人追放論」と呼ばれる。両者の関係は別に論じる。

⁶ 同じギリシア語であるが、明らかに文学を指す場合は「虚構」という訳語を用いる。Gill (1993)は、真理値をとらない「虚構(fiction)」はこの対話篇の対象ではないと論じ、Herrmann (2020, 41, n.21)らが従うが、私はこの概念をより広く理解して論じる。

⁷ Baima (2017)がこの箇所を主題にする唯一の研究文献だが、個々の読みに正確さを欠き、結論も説得的ではない。

⁸ φάντασμαは直前のφάινεσθαιを受けた名詞; cf. Adam (1902/1963, 121)。

⁹ 以下で登場する5つのψεύδομαιの変化形については解釈が分かれており、後で詳細に検討する。ここでは「虚偽をなす」と訳して、Ψ1~Ψ5の記号で言及する。

¹⁰ この与格も解釈が分かれている。A「に対して to」という対象 (Bloom, Simpson (2007, 343); Baima (2017, 2)は deceive の目的語)、B「において in」という場所 (Griffith, Woolf (2009, 11), Harte (2013, 146), Sevelsted (2021, 121))、C「によって with」という道具的与格 (Herrmann (2020, 40, n.18))。私はAの与格としBも含意すると考えるが、「魂」は実際には自分自身を意味するので再帰的な意味を帯びる。中動態に再帰代名詞が付くことは、Smyth, *Greek Grammar* §1724 参照。「魂」は道具には解し難い。

¹¹ 「そこ ἐκεῖ」は次にでてくる「魂」を、「それ αὐτό」は「虚偽」を指すと解する。

¹² これが何を指すのかも解釈者で議論されている。De Chiara-Quenzer (1994), Simpson (2007), Woolf (2009)は「イデア」を、Gill (1993), Baima (2017)は倫理的な事柄に関わる信念や真理を想定する。

¹³ πρὸς τοὺς πολεμίους (382c8) は通常「敵に対して (against)」という訳で、害するために敵に対してつく嘘と解釈されてきたが、むしろ敵を「恐れている (δεδιώξω)」(382d11) 味方につく嘘のことである。例えば、敵の勢力は大きくないと嘘を言って味方の恐れを取り除き士気を高める場合で、そう考える理由は、敵に害悪をなすことが第1巻のポレマルコスとの議論で「不正」とされていたからである (1.335D)。こう理解すると「葉」という比喩が恐れ除去として生きてくる。「敵に対して」と読む Woolf (2009, 26)は不必要な推測を加えている。

¹⁴ Belfiore (1985, 49)はこれを事実に関する真実であり、事実が確認できない事柄 (神々、英雄、地下世界など) をめぐる物語は意図的な嘘ではないと指摘している。だが、彼女が論じるように知識を見知りに限定するのは狭すぎる。

¹⁵ Hom. *Il.* 2.484-486 で詩人はムーサの女神たちに、人間は不知であるが彼女らは「すべてを知っている」ので語ってほしいと呼びかける ; cf. Belfiore (1985, 55).

¹⁶ Gill (1993, 45)が指摘するように、ここでの「真実」は言明や信念の属性ではなく、全人格の状態である。ギリシア語では「真実な人、虚偽の人」は基本的な倫理的把握であった。

¹⁷ 376e10 の表現は形容詞中性形と抽象名詞という組み合わせで、違和感を残す。この ψεύδος は否定的な意味での「嘘」とは限らず、肯定的な意味での「技巧的で美しい詩的なフィクション」の意味も持っていたこと、そして Hes. *Th.* 27 がその例にあたることを、Belfiore (1985, 51)が論じている。通常その箇所と関わるとされる Hom. *Od.* 19.203 も参照。注6で説明した「虚構」という訳語使用の理由である。

¹⁸ この一部の「真実」を、虚構を作る際に使う個別事実とするか (Belfiore)、神等の正しい記述とするか (Sevelsted (2021), 116-117) で解釈が分かれる。前者を取る。

¹⁹ 「立派に=美しく (καλῶς)」の重要性は 3.401E-402A にある ; cf. Sevelsted (2021).

²⁰ 軌範が2つであることは 380D, 383A で明言されているが、Baima (2017, 2)は不正確にも3つの観点でまとめている。「虚偽・欺き」の否定が独立した軌範ではない点が重要である。

²¹ この強調形の動詞は 3.391d3 でも用いられる。

²² 6.501E 「私たちが言葉で物語っている (μυθολογοῦμεν) 国のあり方 (ポリテイアー)」。

²³ 以下は主な諸訳であるが、煩瑣となるため書誌情報は挙げず訳者名で示す。また、訳語から態に分けており、中動態を be deceived と訳す等は考慮しない。¶1: 382a1 [Med] Brandwood, “lie” Bosanquet, Bloom, Herrmann, “deceive or lie” Shorey, “deceive” Griffith, Murray, Waterfield, R. E. Allen, Baima, “tell a falsehood” Comford, “say or act out something false” Rowe, “be false/deceitful” Harte, “lügen” Schleiermacher, “mentir” Leroux, 「偽る」山本、藤沢/[Pass] none; [Neutral] “be false” Grube-Reeve.

²⁴ アデイマントスは第2巻前半の「正義」への問題提起で、詩人を持ち出す人物であった。

²⁵ ¶2: 382a8 [Med] “lie” Bloom, Herrmann, “tell falsehoods” Grube-Reeve, “deceive” Baima, “täuschen” Schleiermacher, 「偽る」山本、藤沢/[Pass] Brandwood, “be deceived” Murray, Waterfield, Allen, Gill, Rowe, “be false/deceived” Harte, “être trompé” Leroux; [Neutral] “choose falsehood” Griffith, “presence of untruth” Comford, “falsehood” Shorey, “be false” Bosanquet.

²⁶ Jowett & Campbell (1894, 106)は ἐπεῖσθαι が ψεύδεσθαι を “explain or correct” するために加えられていると説明し、多くの解釈者に受け入れられている。ただし、彼らは「欺かれる」という受動で理解している。

²⁷ Schofield (2007, 144) と Herrmann (2020, 38) は $\Psi 3$ を中動態“lie”、 $\Psi 4$ を受動態“be deceived”と訳し分けて、この間に転換を見ている。Herrmann (2020, 38) は $\psi\epsilon\upsilon\delta\epsilon\sigma\theta\alpha\iota$ で一旦区切ってそれ以降をまとめて訳す構文で理解しているが、382b2 の $\tau\epsilon\ \kappa\alpha\iota$ を並列でなく言い換えをとることは困難であり、b3 の $\tau\epsilon\ \kappa\alpha\iota$ は明らかにこの並列を受けた言い直しである。

²⁸ $\Psi 3$: 382b2 [Med] “lie” Bloom, Herrmann, “deceive” Baima, 「偽る」山本、藤沢 / [Pass] Brandwood, “being lied to” Waterfield, “being deceived” Griffith, Murray, Allen, Gill, Rowe, Sevelsted, “be false/deceived” Harte, “sich zu täuschen” Schleiermacher, “être trompé” Leroux / [Neutral] “presence of falsehood” Cornford, “deception” Shorey, “be false” Grube-Reeve, Bosanquet, Woolf. 前注の2人を除くすべての解釈者は $\Psi 3$ と $\Psi 4$ を同じ態で訳しているため、 $\Psi 4$: 382b2 のリストは省略する。

²⁹ $\Psi 5$: 382b8 [Med] none / [Pass] Brandwood, “has been lied to” Bloom, “has been deceived” Griffith, “has been told a falsehood” Grube-Reeve, “deceived” Shorey, Murray, Rowe, “is deceived” Allen, Sevelsted, “deluded” Bosanquet, “be false/deceived” Harte, “des Getäuschten” Schleiermacher, “on a trompé” Leroux / [Neutral] “entertain untruth” Cornford, “falsehood” Waterfield, 「偽りにおちいつている」山本、藤沢。Adam (1902/1963, 122) は tell a lie という解釈に反対している。

³⁰ Harte (2013, 147, n.22) は転換点を $\Psi 3$ (382b2) と記すが、内容と直前の翻訳から $\Psi 2$ の誤りであろう。

³¹ Harte (2013, 144) もこの箇所が 2.382a4-5 に遡及すると認めている。「嫌悪する ($\mu\sigma\acute{\omega}$) 」という動詞が共通するが、私は引用部が「真実の虚偽＝無知」を指すのではなく、通常の意味での「虚偽をなす、嘘をつく」を意味すると考える。対比される「意に反した虚偽」と「無知」もそれに対応して、第2巻とは異なる事態を指す。「自ら進んで嘘をつく」という「言論における虚偽」は「ソクラテスの逆説」にそのままでは当てはまらないからである。その限りで、この参照箇所の扱いには慎重を期すべきであろう。

³² 問題の整理と用語は論者によって様々である。例えば、De Chiara-Quenzer 1994 はいくつかの基準を示して「嘘 (lie)、誤り (error)、誤魔化し (deception)」を区別している。

³³ しばしば指摘されるように、ギリシア哲学では「真、偽」は必ずしも命題だけの特性ではなく、むしろ人のあり方がより重要な場面である；注16、及び Harte (2013, 147) 参照。

³⁴ ホメロスで形容詞は、*Il.* 4.235 「父なるゼウスは嘘つきの人間に味方されることは決してない」が唯一の例とされる。

³⁵ *Hom. Od.* 14.124-125 では、「真実を語る」との対比で吟遊詩人が「虚偽を語る ($\psi\epsilon\upsilon\delta\omicron\nu\tau$) 」と言われる。

³⁶ 中動態で目的語(対格)をとる他動詞としての用例は *Lg.* 11.921A にある。*Resp.* 1.331B もそう解釈できるかもしれない。

³⁷ *Resp.* 2.382b2, b8, 3.413a7 以外では、*Prot.* 358c5, *Meno* 71d6, *Th.* 195a8, 200a6 の4例のみ。LSJ はこれらのうち *Prot.* 358c5, *Meno* 71d6, *Th.* 195a8 を受動態 (be deceived, mistaken in or about) の用例として挙げているが、文脈上は能動的な意味でしか解釈できない。

³⁸ 「互いに欺く ($\acute{\alpha}\lambda\lambda\acute{\iota}\lambda\omicron\upsilon\varsigma\ \acute{\alpha}\pi\alpha\tau\epsilon\upsilon\epsilon\iota\nu$) 」はクセノファネスの批判論点である (DK 21 B11=LM XEN. D8; B12=D9)。ピンダロスも神々の語りの真偽を論じている (*O.* 1.27-36)。

³⁹ Gill (1993, 54) や Harte (2013, 149) は「ソクラテスの逆説」への関連を指摘している。

⁴⁰ 「不正を行う」は *Crito* 49A, *Gorg.* 509E、「悪を欲する」は *Men.* 77C-78B にあり、倫理学では「アクラシアーの否定」にあたる。

⁴¹ *Hipp. Mi.* 376B; cf. *Resp.* 9.589C, *Gorg.* 488A. ソクラテスの逆説については Weiss (2006) 参照。

⁴² 虚偽を言うとは、真実という的を射ようとして当て損なうことである (*Soph.* 228C-D)。

⁴³ 「真実について虚偽をなしている $\tau\omicron\ \acute{\epsilon}\nu\psi\epsilon\upsilon\sigma\theta\alpha\iota\ \tau\eta\varsigma\ \acute{\alpha}\lambda\eta\theta\epsilon\acute{\iota}\alpha\varsigma$ のは悪 $\kappa\alpha\kappa\acute{\omicron}\nu$ である」(3.413a6-7)。この例にも中動態と受動態の解釈問題がある。[Med] “se faire illusion” Leroux / [Pass] Brandwood, “be deceived” Shorey, Bosanquet, Murray (1996, 149), “being deceived” Griffith, Allen, Woolf (2009, 12), Herrmann (2020, 54), “be cheated” Rowe, “have a mistaken idea of” LSJ. 私は能動的意味の中動態と解する。

⁴⁴ “The emphasis of 382A-D is on *lying* and its contexts, not on *being deceived*” と論じる Herrmann (2020, 41) がこれに最も近いが、彼は **Ψ4, Ψ5** を受動態でとる点で私とは異なる。また、自己欺瞞という解釈は、Schofield や Harte の結論と親和的である；cf. Harte (2013, 148-149)。

⁴⁵ 「無知」を「不知＝単に知らない状態」からこう区別するのは *Soph.* 229C, *Lg.* 9.863C, *Lys.* 218A-B, *Symp.* 204A など；納富(2017, 296-299)参照。

⁴⁶ 「無知」は *Prot.* 358c4-5, *Th.* 195a9 では ἀνεύσθαι, *Euthd.* 286d6-7 では ψεύδεσθαι で説明される。

⁴⁷ *Ap.* 29B 等参照。Belfiore (1985, 50) は適切にもこう理解して *Soph.* 229C を参照している。プラトンは多くの対話篇で「無知／不知」の2語を正確に区別して用いており（注45参照）、*Resp.* 2.382C も基本的にこの区別が有効でそれぞれの意味が適用される；pace Harte (2013, 141)。

⁴⁸ Sevelsted (2021, 123) は「魂における状態」（382b8-c1）を「虚偽の語り手の心のなかの真実・真なる信念」ととる。そのような信念モデルは一般的であるが、取らない。

⁴⁹ Belfiore (1985, 50) はこの「模倣」としての嘘を、語り手が実際に持っている信念とは異なる信念を持っていると主張することと説明する。しかし、信念だけでは説明しきれない。

⁵⁰ 2.377e1-3 での絵画の比喩が対応する。

⁵¹ この例に関して Schofield (2007, 147-148) は、どんな具体例も絶対に「正しい」もの＝アイデアではないという論点で説明するが「真実を語る」と正義の関係はそれでは十分には説明されない。*Xen. Mem.* 4.2.14-17；Hesk (2000, 151-152) も参照。

⁵² *Hes. Th.* 233-235 で海の神ネレウスが「虚偽なく真実である（ἀψευδέα καὶ ἀληθέα）」から「正しい宣告（θεμιστέον）を忘れず、正しく（δίκαια）思いやりある思慮を知っている」と語られ、真実と正義が重ねられている；cf. Belfiore (1985, 56-57)。政治的文脈でも、*Dem.* 19.184 は虚偽を語ることを不正として批判している；cf. Schofield (2007, 140-141)。アリストテレスの倫理学で「真実」は人柄の徳目であった（*EN.* 4.7）。

⁵³ Harte (2013, 144) は 7.535D-E（本来の哲学者の特性）を 382A（真実の虚偽）への回顧と解釈する。他に、3.389B, 414B-C, 5.459C-D, 6.485B-D, 490B, 7.535E が検討されるべき箇所。

⁵⁴ Herrmann (2020, 42-43) がこのような方針を示しており、正しい方向だと考える。

[参考文献]

- Adam, James, 1902/1963. *The Republic of Plato*, edited with critical notes, commentary and appendices, with a new introduction by D. A. Rees, vol. 1, Cambridge University Press.
- Baima, Nicholas R., 2017. ‘Republic 382A-D: on the dangers and benefits of falsehood’, *Classical Philology* 112, 1-19.
- Belfiore, Elizabeth, 1985. “Lies unlike the truth”: Plato on Hesiod, *Theogony* 27’, *Transactions of the American Philological Association* 115, 47-57.
- Brandwood, Leonard, 1976. *A Word Index to Plato*, W. S. Maney & Son Ltd.
- Calabi, Francesca, 2013. ‘The noble lie’, in *The Painter of Constitutions: selected essays on Plato’s Republic*, eds. Mario Vegetti, Franco Ferrari and Tosca Lynch, Academia Verlag, 73-79.
- De Chiara-Quenzer, Deborah, 1994. ‘To lie or not to lie: Plato’s Republic’, *Polis* 13, 31-45.
- Gill, Christopher, 1993. ‘Plato on falsehood – not fiction’, in *Lies and Fiction in the Ancient World*, eds. Christopher Gill and T. P. Wiseman, University of Exeter Press, 38-87.
- Harte, Verity, 2013. ‘Plato’s politics of ignorance’, in *Politeia in Greek and Roman Philosophy*, eds. Verity Harte and Melissa Lane, Cambridge University Press, 139-154.
- Herrmann, Fritz-Gregor, 2020. ‘Plato’s *Phoinikika*: a royal lie in the Republic’, in *Some Organic Readings in Narrative, Ancient and Modern*, eds. Ian Repath and Fritz-Gregor Herrmann, Barkuis Pub., 33-64.
- Hesk, Jon, 2000. *Deception and Democracy in Classical Athens*, Cambridge University Press.
- Jowett, Benjamin and Campbell, Lewis, 1894. *Plato’s Republic: the Greek Text*, vol. III. Notes, Oxford: Clarendon Press.
- Murray, Penelope, 1996. *Plato On Poetry*, Cambridge University Press.

- Schofield, Malcolm, 2007. 'The Noble Lie', in *The Cambridge Companion to Plato's Republic*, ed., G. R. F. Ferrari, Cambridge University Press, 138-164.
- Sevelsted, Rasmus, 2021. 'Myth and truth in *Republic* 2-3', *Plato Journal* 22, International Plato Society: online, 115-131. <https://impactum-journals.uc.pt/platojournal>
- Simpson, David, 2007. 'Truth, truthfulness and philosophy in Plato and Nietzsche', *British Journal for the History of Philosophy* 17, 339-360.
- Slings, S. R. 2003. *Platonis Rempublicam*, Oxford Classical Texts, Oxford University Press.
- Weiss, Roslyn, 2006. *The Socratic Paradox and Its Enemies*, The University of Chicago Press.
- Woolf, Raphael, 2009. 'Truth as a value in Plato's *Republic*', *Phronesis* 54, 9-39.
- 納富信留. 2017. 『哲学の誕生 —ソクラテスとは何者か—』, ちくま学芸文庫.